

1月総評 西躰かずよし

今月は、若い書き手の作品に惹かれるものが多くあった。個人的な経験によるのかもしれないが、青春は華やかなものというより、むしろ痛ましさと隣り合わせといった印象のほうが強い。思い出されるのは、原口統三や高野悦子らのことであり、彼らの痛ましさは純粹さが内包する問いから生まれたのかもしれないと思う。今回の評は、そうした作り手の問いが垣間見えるような作品を中心に選んだ。

投げ出した四肢に
日差しをたくわえて
わたし
銀杏の木になっている

さいう（愛知県）

鮮やかな身体感覚とっていい。こうした鋭い感覚は、作者の他の作品からも伺える。たとえば「教室の窓から落ちる／ひかりには／踏みにじりたくなる音がある」など。自身を銀杏の木と感じたり、光の中に音を感じたりできるのはこの作者ならではのだろう。

わたくしから はみ出たものを
なかったことにして
カミソリは光るのを止めた

藤色（京都府）

はみ出たものをなかったことにするというところにある種の痛ましさを感じる。光るのを止めた剃刀が光を取り戻すことはあるのだろうか。

九限目も終わりあなたを待ってい
る五分に五分だけの 初雪

小島 涼我（佐賀県）

単純に、青春の一コマを描いた歌とも読めるが、9時限目までの長い時間と、待っている間の5分という時間とのコントラストなど、細かな工夫がされている。そして待つ間だけの初雪。ロマンチックな情景が浮かび上がる。

冬を絵にしたら尖った丸になる

細村 星一郎（東京都）

冬を絵にすれば何故尖った丸になるのかの説明はない。尖った丸というのはそれ自体矛盾するが、それ故、自身の矛盾を冬の絵に託しているようにも見える。

あなたから順に忘れる砕氷船

花澤 希海（千葉県）

忘れられていくあなたは恋愛の対象のようでもある。最も忘れ難いものから順に忘れていってしまうということ。恋歌にも読めるけれども、人生もまたそういうものなのかもしれない。

かたっぽの手袋忘れ 春が来る

ベロニカ（神奈川県）

片方だけなくなるのが、両方なくしてしまうよりも一層切なく感じるのは、かつては揃っていたということを喚起させられるからだろう。最後の「春が来る」によって時間の経過が鮮明になる。

中庭のひかりの中で話したね

春の雨には匂いがないこと

白野（新潟県）

呼び起こされた記憶の断片のようにも見える。雨の匂いがないことを話した君はいまもまだここにいるのだろうか。

冬の雷出席に○ゆっくりと

長谷川柊香（宮城県）

出席にゆっくりと○を付けた理由は何であったのだろう。こたえは冬の雷だけが知っているのかもしれない。

うどん屋の跡にうどん屋

まひるまの人の少ない

バスにゆられて

郡司和斗（茨城県）

閉店した店舗のあとに新しい店舗ができるのは当たり前のことだろう。けれども、作者のまなざしは、その向こうにある。乗る人の少ないバスにゆられる作者と、閉店と開店が交錯する情景が響き合う。常に変わっていく人々の営みのはかなさのようなものが感じ取れる歌に仕上がっている。